

オルガンと室内楽の午後

芦屋室内合奏団

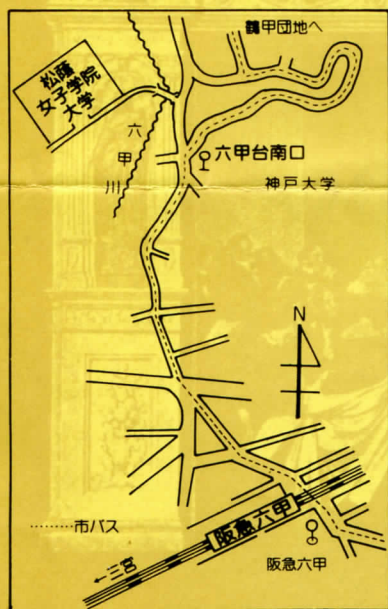
第18回定期演奏会

プログラム

- | | |
|-------------|----------------------------------|
| G. P. テレマン | ○ 組曲 変ホ長調 “リラ” |
| J. ハイドン | ○ 自動オルガンのための3つの小品 |
| J. ハイドン | ○ オルガン協奏曲 第2番 ハ長調 H. XVIII No. 8 |
| H. J. ベールマン | ○ クラリネットと弦楽五重奏のためのアダージョ |
| A. C. ニールセン | ○ 小組曲 イ短調 op. 1 |
| O. レスピーギ | ○ リュートのための古代舞曲とアリア 第3組曲 |

オルガン：鈴木 雅明

指揮 / クラリネット：酒井 睦雄



1984年11月25日(日) 3:00P.M.

松蔭女子学院大学チャペル

(市バス③⑥系統「六甲台南口」下車)

●主催 / 芦屋室内合奏団

●協賛 / 松蔭女子学院大学

入場料：¥500(中学生以下無料)

芦屋室内合奏団第18回定期演奏会

オルガンと室内楽の午後

オルガン：鈴木雅明 指揮／クラリネット：酒井睦雄

1984.11.25 (日) 3:00 P.M.

松蔭女子学院大学チャペル 入場料 ¥500

オルガンと
室内楽の午後



芦屋室内合奏団





オルガンと室内楽の午後

第18回定期演奏会

芦屋室内合奏団



ごあいさつ

昨年は主要メンバーの転勤のため定期演奏会を断念せざるを得ず、毎年ご来聴を楽しみにしていただいている方々にはご迷惑をおかけしました。

今年は、松蔭女子学院大学のご厚意により、鈴木先生のご来演も戴き、高い音楽的理想にささえられたチャペルで、オルガンと共演できることになりました。私達も、酒井先生のご指導の下に、2年分の情熱をこの日に向け、着実に室内合奏団としての力をつけてきたと自負いたしております。これもひとえに皆様方の日頃からの温いご援助の賜物、と深謝にたえません。秋の午後のひとときを、感謝をこめ、皆様と共に室内楽で過ごしたいと存じます。

1984年11月25日

芦屋室内合奏団団長

橋 本 宗 夫

団員一同

Vn.

鳥丸 安雄
(コンサートマスター)

藤本 恭子
福永 精一
福永 千江子
三木 俊一郎
中田 久仁子
信田 貞夫
河田 昌子
石田 茂雄
檀 弥会子
塩谷 由美
浜田 郁子
富田 美幸
小林 良輔
福井 淳子

Vla.

高橋 由仲
河野 建一
伊藤 美香
木村 弥生子

Vc.

鳥丸 直子
宮崎 晴夫

D.B.

中田 和夫

プログラム

♩ G.P.テレマン 組曲 変ホ長調 ミラミ

♩ J.ハイドン 自動オルガンのための3つの小品

♩ J.ハイドン オルガン協奏曲 第2番 ハ長調 H.XVIII No.8

休憩

♩ H.J.ベールマン クラリネットと弦楽五重奏のためのアダージョ

♩ A.C.ニールセン 小組曲 イ短調 op.1

♩ O.レスピーギ リュートのための古代舞曲とアリア 第3組曲

司会 松蔭女子学院大学教授
平島達司



演奏曲目について

◎G.P.テレマン (1681～1767) 組曲 変ホ長調 ムリラ、

ムリラ、は英語のlyre, ドイツ語のLeierで、本来は古代の7弦の楽器であるが、この場合は首から箱を下げてハンドルをまわす、例のライエルマン (辻音楽士、「冬の旅」終曲) の楽器である。この組曲の第3曲がその音色を模したことからこう呼ばれているもので、第1曲はイタリア風の序曲、第2曲はトリオ (中間部) を持つメヌエット、そして第3曲が第1バイオリン以外は音の変わらない「リラ」、第4曲はシチリア舞曲、第5曲ロンド、第6曲ブーレ、第7曲がタランテラのジーク、という構我である。本日はオルガンとの共演上、A=415Hzの調弦を取る。ピッチ=演奏水準、ではない。

◎J.ハイドン 自動オルガンのための3つの小品

} 別紙参照

◎J.ハイドン オルガン協奏曲 ハ長調

◎H.J.ベールマン (1784-1847) クラリネットと弦楽五重奏のためのアダージョ

永く「ワグナーのアダージョ」として有名であったこの曲は、今でもウェーバーやメンデルスゾーンと親交のあったクラリネット奏者ベールマンの作とする説がある。ワグナーは20歳の時ヴェルツブルグで合唱指揮をしていたが、そのころ交際のあったクラリネット奏者ルンメルのためにこの曲を書いたという。出版がワグナーの死後であったため、ベールマンが「ワグナーの名声を利用して発表した」という説を否定しなかったのが事の起りのようである。半音階的和声法や旋律の歌い方からワグナー説が有力ではあるが、私達はこのなじみの薄い作曲家の生誕200年を祝しベールマンの名において演奏することにした。

◎C.A.ニールセン (1865-1931) 小組曲 イ短調 OP. 1

ニールセン (Carl August Nielsen) は我国では有名とは言えないが、デンマークの代表的作曲家として、またグリーグ以後の北欧では最も重要な人である。デンマークの小島の、また寒村のペンキ屋の息子として生まれ、1884年コペンハーゲン音楽院に入り、宮廷オーケストラのバイオリン奏者・指揮者、同院の教授をつとめた。6曲の交響曲をはじめ多作の人であったが、彼の作品1である本曲に、すでにその骨太な古典的雰囲気、満ちた作風がうかがわれる。曲は全3曲から成る。第1曲は序曲でひきずるようにメランコリックな伴奏に乗って歌曲的な旋律が奏され、一度だけのクライマックスで終る。第2曲はワルツ風のトリオを持つスケルツォの間奏曲である。終曲は第1曲の回顧を序奏になじみやすくドラマチックなアレグロが続く。

◎O.レスピーギ (1879-1936) リュートのための古代舞曲とアリア 第3組曲

現代イタリアの作曲家レスピーギは、ルネサンス音楽の再認識にも寄与した人で、古い文献から16～7世紀の無名の作曲家の曲を現代に甦えらせた。その代表格がこの3つの組曲であり、作者不詳を含む数曲を編曲編成し高度な作品に結晶させた。特にこの第3組曲は最も完成度の高いもので、私達の多くにとっても、多感な青年時代に「シチリアの乙女よ、さようなら」といった標題に胸つまらせながら演奏した思い出深い曲である。曲は4曲からなり、第1曲はピチカートの上に優美で古典的なメロディが歌うイタリアーナである。「宮廷のアリア」の題のついた第2曲では、ピオラのゆううつなメロロディの反復の間に、同じ原作者のいくつかの曲が巧みに配されている。第3曲「シチリアーナ」は原作者不詳の流麗なメロディを中心に進められる。第4曲はロンカリのギター曲によるパッサカリアで、ギター風の重音がバイオリン泣かせである。ト短調の終止の後には我々の乾杯が待っている。

J、ハイドン＝自動オルガンのための3つの小品

自動オルガンというのは、日本では余り知られていませんが、小さいけれど、れっきとしたパイプオルガンに、自動演奏装置をつけたものです。時計の飾り（又は、一定の時間が来ると鳴る仕掛け）がついていることが多いので、『F l ö t e n u h r（フルート時計）』と呼ばれています。これの大きな特徴は、誰かの演奏を録音した現代のテープと違って、作曲者が直接、1つの演奏例を固定して組み込むところにあります。ですから、18世紀当時の理想的テンポや装飾音の演奏の仕方を知るのに、極めて貴重な資料になるというわけです。

今日演奏する曲は、J、ハイドンがロンドンへ出発する時、N、エステルハーツィ公に献呈した1793年製の自動オルガンに組み込まれている作品集の最初の3曲（いずれもハ長調）です。

J、ハイドンのオルガン協奏曲 第2番ハ長調

ハイドンの作品を整理したホボーケンが、チェンバロまたはオルガンの協奏曲として第Ⅷ類に分類した曲が11曲あります。そのうちの6曲がオルガン協奏曲と考えられており、本日演奏される曲は、ホボーケン第Ⅷ類第8番ハ長調で、しばしば、オルガン協奏曲第2番と呼ばれています。

ハイドンがこれらの曲を作曲した1766年ころの主君エステルハージ家の楽団員は、ヴァイオリン6（ヴィオラを含む）、チェロ1、コントラバス1、オーボエ2、ファゴット2、ヴァルトホルン4という規模であったと記されています。なので、本日の演奏会の編成は、これよりもわずかながら大きくなっております。また、今回の演奏のピッチは、昔のと通りの415ヘルツで、現代ピッチよりも半音低くなっています。昔の記譜の慣例は、ポジティブは書かれているが、ペダルは奏者に任されていたと記されていますので、オルガン用にもチェンバロ用にも同じ楽譜が用いられるということがあったものと思われます。本曲の構成は、

I モデラート II アダージョ III アレグロ

の3楽章構成となっております。

プロフィール

◎オルガニスト 鈴木雅明

チェンバロ、オルガン奏者、昭和29年神戸に生まれ、東京芸大で故矢代秋雄に作曲を学んだ後、同大学院オルガン科入学、広野嗣雄、鍋島元子に師事。昭和54年アムステルダムのスウェーリング音楽院に進み、チェンバロとオルガンのソリスト・デュプロマを得る。昭和55年のフランドル音楽祭で一位なしの二位、57年同音楽祭オルガンコンクール三位となる。以来ヨーロッパ、日本で演奏活動を続け、西ドイツ・ルール州立音大講師を務めたのち、現在松蔭女子学院大学、桐朋学園大学及び相愛大学で教鞭をとっている。

◎指揮者 酒井睦雄

桐朋学園高校音楽科を経て昭和46年桐朋学園大学卒業。その間、クラリネットを北爪利世、二宮和子、F. フックス各氏に、指揮を故斉藤秀雄氏、秋山和慶の両氏に師事。昭和46年より相愛オーケストラ、49年より芦屋室内合奏団指揮者、岐阜県交響楽団常任指揮者。昭和52年、ザルツブルクにてO・スイトナー氏に師事、同年、東京にてS・チェリダッケ氏のゼミナールに参加。現在、相愛大学助教授。

◎芦屋室内合奏団

昭和40年に中島良能を中心とし、神戸大学交響楽団員及びOB14名によって結成、団長橋本宗夫宅を本拠として、年1回の定期演奏会を中心に地味ながら息の長い活動が続けている。延原武春、M. ShoemaKerらを指揮に迎えたが、昭和49年から酒井睦雄を指揮者として、コレリからブリテンにいたるまで、古今の室内楽曲を楽しむほか、知名度の低い曲を紹介するなどユニークな活動を行う。会社員、公務員が主であり夫妻で参加のメンバーも多いため、転勤でもあれば1度に2人の団員が去る困難に耐えつつ、月2回の練習を越えた家族的雰囲気も特色である。

松蔭女子学院大学チャペルとオルガンについて



グラントルグ風箱の取付

このオルガンは、当団のよき理解者でもある平島達司教授を中心に計画され、教授の数度にわたる渡欧調査にもとずき、フランス古典オルガンを理想として製造、昭和58年9月に完成した。製作はフランスのマルク・ガルニエにより行なわれ、古典調律法を用いており、古典オルガンの理想に近いものである。また、その性能を決定するチャペルの建設には竹中工務店があたり、同社技術陣も数度の渡欧で約90の教会の音響調査を行ない、最適の残響と拡散性を目指して、従来の我国教会建築と全く異なったポリシーと独自の工法開発のもとに昭和56年3月に完成したものである。

ストップ仕様

第2鍵盤：グラントルグ

C, D-C³
 ブルドン16'
 モントル8'
 ブルドン8'
 プレストン4'
 フリュート4'
 ナザール2 ⅔
 ドブレット2'
 ティエルス1 ⅔
 フルニチュール 4列
 サンバル 3列
 コルネ 5列 (高音部)
 トロンベツト8'
 クレロン4'
 ヴォアユメヌス8'

第1鍵盤：ポジティブ

C, D-C³
 ブルドン8'
 モントル4'
 フリュート4'
 ナザール2 ⅔
 ドブレット2'
 ティエルス 1 ⅔
 ラリゴ1 ⅔
 フルニチュール3列
 サンバル2列
 クロモノヌ8'

第3鍵盤：レシ

f^a-C³ (グラントルグのグランコル
 ネと同一水準に位置する)
 コルネ5列
 トロンベツト8'

第4鍵盤：エコー

C-C³ (オルガン基壇内部に位置する)
 コルネ5列

ペダル鍵盤

—フランス式ペダル(オリジナルの基本構
 想の大型拡張によるFF-f^a)

—ドイツ式標準型ペダル

(C-f^a) (交換可能)

トランスミッション・ブルドン16'
 トロンベツト12' FF-f^a
 フリュート8' C-f^a
 フリュート4' C-f^a

付 属 設 備

カブラー ポジティブ/グラントルグ
 ペダル・カブラー グラントルグ/ペダル
 つよいトランプラン
 やわらかいトランプラン

パイプ総本数 2,068本

調 律 法 純正5度4個を含むミーン・トーン調律法
 (純正3度4個 在存)

標 準 ピ ッ チ a¹ = 415Hz (20°C)

芦屋室内合奏団定期演奏会の歩み

第1回 1966年3月 芦屋市民会館

コレリ……………クリスマス協奏曲
 ビバルディ……………四季より「春・夏」
 バッハ……………ブランデンブルグ協奏曲 No.5
 モーツアルト……………ディベルティメント K. 136

指揮 中 島 良 能

第2回 1967年1月 芦屋市民会館

バッハ……………バイオリン協奏曲 No.2
 ビバルディ……………四季より「秋」
 レスビーギ……………リュートのための古代舞曲とアリア
 バーバー……………絃楽のためのアダージョ

指揮 中 島 良 能
 バイオリン 鈴 江 苑 生

第3回 1967年7月 芦屋市民会館

ビバルディ……………合奏協奏曲 OP. 3-11
 バッハ……………ピアノ協奏曲 No.1
 チャイコフスキー……………弦楽のためのセレナード

指揮 中 島 良 能

第4回 1968年2月 芦屋市民会館

コレリ……………サラバンド ジョージ バディヌリ
 バッハ……………オーボエとバイオリンのための協奏曲
 モーツアルト……………オーボエ四重奏曲 K. 370
 ブリテン……………シンブル・シンフォニー

指揮 宮 本 政 雄

第5回 1968年11月 芦屋市民会館

ビバルディ……………四季より「冬」
 ボッケリーニ……………チェロ協奏曲
 モーツアルト……………ディベルティメント K. 138

指揮 中 島 良 能

第6回 1969年9月 芦屋市民会館

パーセル……………組曲「アブデラザール」
 パーセル……………トランペットと絃楽のためのソナタ
 テレマン……………3つのバイオリン、絃楽と通奏低音の
 ための協奏曲

指揮 延 原 武 春

第7回 1971年11月 夙川公民館

ヘンデル……………合奏協奏曲 OP. 6-12
 ビバルディ……………合奏協奏曲 OP. 3-12
 ドボルザーク……………絃楽のためのセレナーデ

指揮 奥 田 伸 吾

第8回 1972年11月 芦屋カトリック教会

ビバルディ……………調和の靈感 OP. 3-10
 ビバルディ……………調和の靈感 OP. 3-3
 バッハ……………ブランデンブルグ協奏曲 No.3
 モーツアルト……………戴冠ミサ曲

指揮 M. H. Shoemaker

第9回 1973年12月 芦屋市民会館

コレリ……………合奏協奏曲 OP. 6-1
 グリーグ……………ホルベルグ組曲
 スーク……………絃楽のためのセレナード OP. 6

指揮 M. H. Shoemaker

第10回 1974年5月 芦屋仏教会館

コレリ……………合奏協奏曲 OP. 6-7
 バッハ……………2つのバイオリンのための協奏曲
 ヘンデル……………合奏協奏曲 OP. 6-5,9

指揮 M. H. Shoemaker

第11回 1975年5月 芦屋仏教会館

パーセル……………組曲「アブデラザール」
 モーツアルト……………ディベルティメント K. 136, K. 138
 ビバルディ……………四季より「春・夏」
 ヘンデル……………合奏協奏曲 OP. 6-6

指揮 酒 井 睦 雄
 バイオリン 曾我部 千恵子

第12回 1977年6月 芦屋仏教会館

ビバルディ……………四季より「秋・冬」
 テレマン……………組曲 イ短調
 レスビーギ……………リュートのための古代舞曲とアリア
 バッハ……………組曲 第2番

指揮 酒 井 睦 雄
 フルート 白 井 美和子

第13回 1978年12月 芦屋仏教会館

コレリ……………合奏協奏曲 OP. 6-1
 ヘンデル……………合奏協奏曲 OP. 6-1
 モーツアルト……………アダージョとフーガ K. 546
 グリーグ……………ホルベルグ組曲

指揮 酒 井 睦 雄

第14回 1979年11月 芦屋仏教会館

ヘンデル……………合奏協奏曲 OP. 6-3
 エルガー……………絃楽のためのセレナーデ OP. 20
 ドボルザーク……………絃楽のためのセレナーデ OP. 22

指揮 酒 井 睦 雄

第15回 1980年11月 芦屋仏教会館

モーツアルト……………ディベルティメント K. 136
 ホルスト……………絃楽のための組曲「セントポール」
 ボッケリーニ……………チェロ協奏曲
 モーツアルト……………セレナータ・ノットシュルナ K. 239

指揮 酒 井 睦 雄
 チェロ 斎 藤 達 男

第16回 1981年11月 芦屋仏教会館

ビバルディ……………合奏協奏曲 OP. 3-11
 ヘンデル……………合奏協奏曲 OP. 6-5
 バッハ……………プレリュード ロ短調
 コレリ……………合奏協奏曲 OP. 6-6
 バルトーク……………ジューベンブルグの踊り

指揮 酒 井 睦 雄

第17回 1982年11月 松蔭女子学院大学

チャペル
 モーツアルト……………喜遊曲 K. 136
 モーツアルト……………クラリネット五重奏曲 K. 581
 モーツアルト……………喜遊曲 K. 334

クラリネット/指揮 酒 井 睦 雄



1984. 11. 25 松蔭女子学院大学チャペル

主催 芦屋室内合奏団
協賛 松蔭女子学院大学